

【保健環境研究センター3月だより ～2011/2012シーズンのインフルエンザ～】

奈良県における2011/2012シーズンのインフルエンザは、5年ぶりにA香港型が主流で、やや遅れてB型が流行する様相を示しています。病原体定点で採取されたインフルエンザ様症状を示す患者検体からは、A香港型（43例）およびB型（8例）が検出されています（表）。これらの大部分は2012年1月以降に採取されており、週報に掲載されているインフルエンザ定点報告状況とも合致する結果となっています。また、分離されたウイルス株の赤血球凝集阻止試験の結果からは、A香港型のウイルス性状（抗原性）が今シーズンのワクチン株とはやや異なる可能性が示されました。しかし、2009年の新型インフルエンザウイルスA(H1)pdmAソ連型は全く検出されていません。以上の傾向は全国的にも同様です（図）。国立感染症研究所では、全国各地で分離されたウイルス株の薬剤感受性試験を実施しており、現時点で抗インフルエンザ薬（オセルタミビル、ザナミビル、ペラミビルおよびラニナミビル）に対する耐性ウイルスは見つかっていません。

表. 奈良県のインフルエンザウイルス検出状況(2/28日現在)

検体採取時期	検出ウイルス亜型			
	A(H1)pdm	Aソ連	A香港	B
2011年12月	0	0	4	0
2012年1月	0	0	38	8
2月	0	0	1	0
合計	0	0	43	8

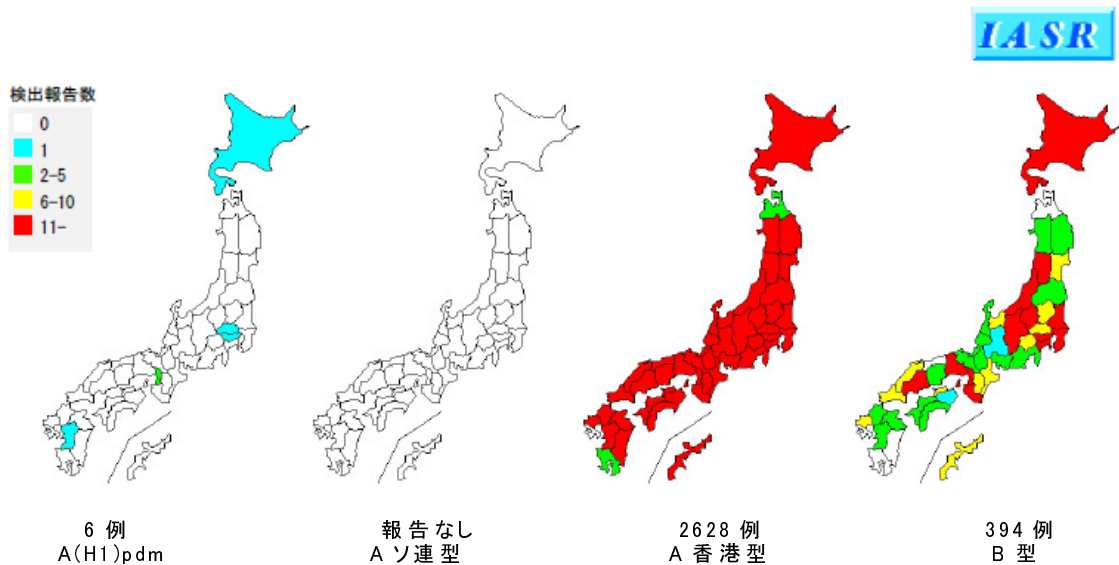


図. 全国のインフルエンザウイルス検出状況(3月5日現在)

3月に入り流行は下火になりましたが、まだインフルエンザは終息したわけではありません。一度かかっても、異なる型のインフルエンザウイルスに再び感染することもあります。うがい、手洗い、マスクの着用といった予防行動を続けてください。

(ウイルスチーム 井上 記)